

である。本書において、我々の關心を捉へるものが、唯にギリシヤ經濟に關する其の透徹せる見解に止まらず、物事を歴史的に觀察するには如何ある可きか、を教へる本書の歴史主義的觀察方法そのものにある事は、原先生が卷首に附せられた解説に指摘せられた所、我々の正に注目す可き點であらう。

所で、こゝに言へる原先生の解説は、二十頁に満たぬ極めて簡潔な小篇であるが、私は特に一般の注意を惹き度いと思ふ。何故ならば、こゝに吐露せられた先生のギリシヤ史學に對する總著の一端は、ギリシヤ經濟の全貌を眼前に彷彿たらしめて餘す所がない。先生は、本解説において、經濟史敘述の陥り易い理論的抽象性を排されつゝ、豊富なザツハケントニスより自ら流れ出るギリシヤ經濟の概括的把握を極めて平明に述べられて居る。本解説を讀めば一般人と雖も、ギリシヤ經濟の相貌を捉へるに難きを覺えぬ。加ふるに譯述も亦極めて明快である。一般教養人に切に播讀を御奨めする次第である。(創元社發行・史學叢書・定價圓貳拾錢)(兼吉正夫)

國防地政學

岩田孝三著

近年の出版界に於ける地政學の登場には正に華々しいものがあつた。此の新たな登場者が時代と國家の要望に應じて現れた事は確かであるが、その華々しさの故に流行兒の風貌を持たされ、その爲に多くの輩流がその波に乗つて來たのである。従つて現在日本で地政學と呼稱せられるものは決して單一の内容を意味して

ゐない。それは明かに地政學の若さがその概念の中に挾雜物の席を占める間隙を許してゐるからであらう。もつと端的に言へば地政學の何たるかに就いて所謂地政學者が各人各様の旗を翳してゐるのである。その中にあつて著者陸軍經理學校教官、岩田孝三氏ほどのやうな立場を取つてゐられるのであらうか。氏が昨春朝日新講座の一冊としてものされた「地政學」によれば、一應翻譯地政學者の誤謬を踏み廻つて日本の地政學の樹立を目指して居られる事に注目し度い。然し乍ら尙それは日本の傳統的地盤の上に立つ地政學ではなく、「獨逸地政學に、一應の方法、論理、目的を借りねばならないのであり、その地政學的究明の基礎を『血と地』の生命的結合所産を檢討し」て行く事に置かれ、以て日本民族の「所濱に係はる諸政治問題を分析し、指導して行く」事を目的として居られるのである。獨逸地政學からの脱皮には深く敬意を表しなればならぬにしても、日本の地政學を唱せられ乍ら觀念に於いて獨逸的地盤に立つが如き矛盾はも早ないであらうか。そのやうな日本の地政學が樹立されるといふ現象の地政學的解明を企てるならば、そこに割り切れぬものを見出し得るであらう。

此の『國防地政學』に於いても同様な立場に立つて居られる。本書の序文に「國防地政學」が日本文化の世界的光被といふ皇戰に關する研究たるべきを述べられ、第一章にその戦ひが専ら總力戰として考へらるべき事を述べられてゐる。第二章、第三章に「血と地」の生命的結合を考究せられ、日本民族を中心に各民族性の成立に及んで居られる。その民族性と土地の位置的性格とから、

第四章陸戰に關する國防地政學、第五章海洋作戦に關する國防地政學、第七章空戰に關する國防地政學を考究せられ、第六章は大東亞戰爭の地政學的意義を述べて、亞細亞大陸と太平洋との「産靈」たる日本の使命を明かにせられてゐる。之等の勞作から匪々にして興味ある洞察を見出す事は讀む者の喜びである。慾を言へばその數多い圖版が、例へば上海の英文雜誌「第二十世紀」からの轉載であつたりして、獨自性に乏しい事は内容をそれから推し計られる危険があるが故に惜しまれる。然し乍らその圖版の豊富さと在來の地政學者の混迷せる文章を排しての平明な記述は喜ばしい事である。

以上、地政學と戰略學とを關聯づけた最初の纏つた本として紹介の拙筆を走らせた次第である。(昭和十八年六月、帝國書院發行、A5版、四二五頁、賣價五圓)(村上次男)

漢三國六朝紀年鏡圖說

京都帝國大學文學部 第一冊 梅原未 治編著
考古學資料叢刊

支那古鏡鑑が、その勝れた、又特異な造形性の故に人々の注意を惹き、殊に又、それが我國上代の考古學的の研究に取つては特殊な關係に立つ事が本邦學者の特に強い關心をよび起して、こゝに觀賞を越えた科學的な研究が我國學者の手によつておこされ來つた事は、こゝに改めて述ぶるまでもないところであらう。而して或は美術工藝品として齎らされ、或は我古墳より發掘し出された數々の鏡の内にあつてその研究に最も確實なる基礎を與へるもの

は云ふまでもなく遺品自體に年記を持つ紀年鏡に外ならないが、それは又單に鏡鑑の歴史を考へる上に於いて根本資料たるにとゞまらず、鏡をめぐるとしての問題の考究が、そこに根本的な足場をもつてあらう。従つて紀年鏡の集録が果すべき役割は甚だ大きいものがあると言ふべきである。

編者は先にかゝる意圖にもとづいて「漢三國六朝紀年鏡集録」なる一書を公にされたが、其後續々加はる新資料は六十面を超え、その總數は百三十面以上にも達したので、こゝにすべてこれらを集録して新に圖說を編み、研究に基礎資料を提供されたのが本書である。

さて、本書は、序說、各說、後編及び附說よりなるが、各說には漢、魏、吳、六朝の各期のものそれ〴〵三八・八・六二・二四面をあげて圖版を對照的に解説が加へられてゐる。もとより鏡鏡については最も知見の豊かな編者が、その多年の經驗にもとづいて各鏡にわたり圖像的特色や鏡體の構造、殊に目立つた差違點などを指摘される行文の間に我々は自然に我々自身の觀察眼が教導されて行くのを覺える。そして、鏡銘の解讀には常に新な檢討が加へられて、前考や舊文に改訂を加へられた點も多いが、この場合、新資料多數の加はつた今日の知見に基いて、相似た時代のものに通じた特性を十分確實に把握すること、換言すれば、鏡作の全體に於ける動向の見通しを多數例の内から確實に導く事によつて再檢討が絶えず行はれてゐる。従つて鏡式發展についての見解乃至その再吟味が各鏡解說の内にあつても強く盛られてゐる。